
研究情報

第2回アジア作物学会議に出席して

山 岸 徹

(東京大学農学生命科学系)

アジア作物学会 (The Asian Crop Science Association) 主催の第2回アジア作物学会議 (The 2nd Asian Crop Science Conference, The 2nd ACSC) が、1995年8月21~23日に福井県立大学を会場として開催された。第1回は1992年に韓国で開催されたが、その折開かれたアジア作物学会議国際委員会において、日本で開催が決定された。それを受け、日本作物学会のもとに第2回アジア作物学会議組織委員会が組織され、準備を進めてきた。会場となった福井県立大学は、1993年創立の施設も近代的な、国際会議にふさわしい大学である。また、福井市内から会場への車窓からは、登熟期の水田風景が広がり、作物学会議の雰囲気を醸し出していた。

会議の日程は8月20日の参加登録・国際委員会に始まり、21日に開会式、全体講演およびミキサーが行われ、22、23日にはシンポジウム、ポスター展示と小集会在、また23日にはパーティーが開かれた。24、25日にはエクスカッションが行われた。また本会議と関連して、20日には福井県主催のコメに関するシンポジウムが、24日には福井県立大学主催の第2回国際FPUバイオサイエンスシンポジウムが開催された。会議初日には広々とした県立大学の芝生の中庭においてミキサーが行われ、作物学会の懇親会とは異なる雰囲気であり、昂揚した気分をおぼえた。

「急増する人口と悪化する地球環境のもとでの食糧生産確保を目指して」をモットーに掲げた会議では、まずNorman Borlaug氏 (Texas A & M Univ.), George Rothschild氏 (IRRI), 三輪睿太郎氏 (農林水産技術会議) による全体講演、それに引き続き、タイ、フィリピン、インドネシア、マレーシア、ベトナムの作物学会代表による地域報告が行われた。シンポジウムは、次のような8つのタイトルに分かれて行われた。

1. 地球環境変化と作物生産, 2. 米の品質, 3. 低投入・持続型農業及び作付体系, 4. 多収の基礎と

しての作物生理, 5. 水稻の直播栽培, 6. ストレス環境下の作物生理, 7. 作物のモニタリング, 診断, および予測, 8. 作物生産とバイオテクノロジー

各シンポジウムでは、3~4題の招待講演、および4~5題の一般講演が行われた。ポスターセッションでは229題の発表が行われた。各シンポジウム会場は終日ほぼ満席の状況で、進行も順調に進められた。ただ、時間の関係から、総合討論が必ずしも十分できなかったシンポジウムもあったようだ。また、各スピーカーに対し、事前に講演時間の徹底を十分に行う必要を感じた。

小集会については別途報告があると思うが、Ideotype of Root System in Rice, Young Scientists Forum; Challenges in Crop Science Toward an Uncertain Future, Forum for Soybean Researchersの3つが行われた。午前、午後のシンポジウムに引き続いて行われたにもかかわらず各会場とも盛況であり、海外からの参加者にも好評であったと聞く。

大会の参加者は、海外から約120名、国内から約400名 (約40名の海外からの留学生ならびに約50名の1日参加者を含む)、合計500名を越え、当初予想を上まっていた。海外からの参加者は、韓国29人、フィリピン24人、台湾17人、中国17人を始めとする計27の国・地域にわたっていた。

会議の内容については、現在プログラム委員会のもと編集が進められ、本年2月刊行の予定であるのでそちらをご覧頂ければと思う。

次回の第3回大会は1998年台湾で開催されることになっている。今後の発展を計るためにも、多くの会員の参加が望まれるところだ。

一方、1992年に始まった国際作物学会は、1996年にニューデリーで第2回大会が開催される。これとの対応も、今後の課題として検討していくことが必要となるであろう。